

【書評】

ロシア・フォークロアの会 なるうど編著『ロシアの歳時記』

安島里奈

本書『ロシアの歳時記』は、2018年6月に発行された「ロシア・フォークロアの会 なるうど」によるエッセイ集である。まず、「ロシア・フォークロアの会 なるうど」について紹介する。40年ほど前に「ロシア・フォークロア談話会」が、ロシアのフォークロアに関心を持つメンバーにより発足した。これが2010年に新体制となり、現在の会員制の研究会「ロシア・フォークロアの会 なるうど」となった。現在会員数は約30人である。ホームページ¹の会則によれば、研究会の目的は「ロシア・フォークロアとその関連分野について研究する会員、関心を持つ会員が、相互に情報交換を行い、研究成果の発表をする」ことである。研究会の活動には、月1回行われる例会での報告、会誌『なるうど』の年2回の発行などがある。2018年12月現在、会誌は77号まで刊行されている。

本書では、冬、春、夏、秋の順に章が設けられている。各季節の章の始めには、その季節の特徴が概略的に記される。その後にエッセイが続き、コラムが挿入される。各章の最後には、チャイコフスキーの《四季》が章の季節ごとに紹介される。構成に従って読めば、1年における農民たちの生活の流れがよく分かるようになっている。紙面の許す限りその内容を構成順に紹介する。

冬の章に収められているのは、「新年について」、「スヴァートキの占い」、「冬の妖怪 シュリクン」、「ツリーとマロース爺さんと雪娘」、「冬の門付け」、「昔話」、「冬の民謡」、「マースレニツァとブリヌイ」である。まず「新年について」でロシアではいつ1月1日から1年が始まるようになったのか、その歴史的事実が主に紹介される。「スヴァートキの占い」では、クリスマスから洗礼祭前夜までの12日間の祝祭期間であるスヴァートキに行われる占いについて紹介される。スヴァートキでは、娘たちがその年の運命を様々な方法で占った。新年の占いは現代においても受け継がれており、今日ではスマートフォンやテレビを使ったものまでであるという。スヴァートキの頃、凍った川や湖に開けられる穴から地上に出てくるのは「冬の妖怪 シュリクン」だ。ここでは、シュリクンの外見的、行動的特徴、またその由来がスヴァートキに伝統的に行われる人間の行為であること、時代とともにシュリクンのイメージは変容したことが述べられる。「ツリーとマロース爺さん

¹ 「ロシア・フォークロアの会 なるうど」 <http://narod.web.fc2.com/index.html> (2018年12月7日閲覧)



と雪娘」では、ツリーとロシア昔話に登場するマロース爺さんと雪娘がクリスマスの3点セットの如くなった経緯が歴史的、文化的観点から説明される。「昔話」では、昔話の種類（ノヴェラの昔話、世態的昔話、魔法昔話）、魔法昔話における論理的な構成を発見した民俗学者プロップ、魔法昔話に特徴的なリズムカルな語り口が紹介される。「冬の民謡」では、日本でよく知られている《トロイカ》の歌詞は実は完全な創作であり、原曲とは異なると指摘される。この他にも冬のトロイカを歌った民謡の紹介がある。「マースレニツァとブリヌイ」では、冬と別れを告げるこの儀礼のある一週間に行われること、その期間に食べられるブリヌイについて書かれている。

春の章には、「渡り鳥」、「ロシアの雪割草」、「春雷」、「土起こしと種蒔き」、「放牧」、「復活祭」、「春の外遊び」、「春の門付け」、「春のパンさまさま」、「聖霊降臨祭」が収められている。春の訪れを知らせるのは「渡り鳥」だ。このエッセイでは鳥にまつわる習慣や占い、言い伝えが紹介されている。「ロシアの雪割草」で指摘されるのは、日本では『森は生きている』においてママ娘が森にとりに行く花がスノードロップだとされているが、実際には雪割草ではないかということだ。「春雷」では、雷にまつわる俚諺や迷信、二重信仰、民衆の春雷の捉え方、また作家の詩作活動におけるその受容についても触れられる。春に行われるのが「土起こしと種蒔き」だ。キリスト教受容後、聖者たちの名が日付代わりにされ、それが農事の目安となった。エゴーリイの日に「放牧」が始まり、二重信仰の様相が現れている儀礼が行われたが、ソ連時代の農業集団化と反宗教政策により消滅していった。春に行われる最も重要な祭りは「復活祭」だ。このエッセイでは、復活祭の前後に行われること、復活祭での儀式、クリーチやパスハなどの特別な食べ物、彩色卵などについて書かれている。「春の門付け」では、ヴィニューシニクというかつてあった習俗が紹介される。近年古き良き文化としてそれを復活させる動きもあるという。「聖霊降臨祭」では先祖の追善供養が行われる。聖霊降臨祭前の木曜日、セミークでは先祖とは別に、天寿を全うせずに死んだ者の追善供養が行われた。

夏の章では、「イワン・クパーラ」、「ルサルカ」、「蒸風呂小屋」、「草刈りと麦刈り」、「養蜂」、「キノコとベリー」、「イリヤの日」が収められている。洗礼者ヨハネの誕生日「イワン・クパーラ」の時期は植物の力が最高潮になるとともに、恐ろしい魔術の力もピークを迎える。聖霊降臨祭の頃、女性の姿をした妖怪「ルサルカ」が姿を現す。ルサルカの出現する時期、容姿や行動にあらわれる植物崇拜的要素や儀礼的要素に加え女性性について述べられる。「蒸風呂小屋」では、それが入浴の場以外にも占いや儀礼や病気治療の場としても使われたこと、またここに棲むとされるバンニクについても述べられる。「イリヤの日」では、聖人イリヤは民衆に恐ろしいイメージを持たれているが、このイメージは、キリスト教受容以前にロシアの人々が信仰していた雷神ペルーンのイメージを引き継

いでいること、英雄叙事詩の一人であるイリヤ・ムーロメツとの混同が背景にあることが述べられる。

秋の章には、「脱穀」、「オヴィン」、「ペーチ」、「亜麻と機織り」、「手仕事と遊びの集い」、「村の婚礼」、「保存食づくり」が収められている。実りの秋になると、穀物を刈り取り、「脱穀」をし、火力を使った乾燥小屋「オヴィン」で収穫物を乾燥させる。オヴィンにはオヴィンニクという妖怪が棲んでいる。「ペーチ」は、ロシアの木造家屋における暖炉でもあり、かまどでもあるうえ、居間の上座に対して舞台裏や天井桟敷の役割も担う。農閑期には「手仕事と遊びの集い」がある。このエッセイでは、北ロシアのヴォログダ県ジェルノコヴォ村の例が挙げられている。「村の婚礼」では、婚礼が農繁期ではない秋・冬季に多く行われたこと、結婚儀礼の流れ、泣き歌について書かれている。「保存食づくり」をして冬に備える。

このような農村における慣習や儀礼、衣食住といった生活面だけを紹介するのではなく、それらやフォークロアなどが描かれる文学作品や絵画に関する言及があることも本書の特徴である。ロシア文化における文学や音楽、絵画、宗教の根本には、移ろいゆく四季における生活や儀礼があるということを改めて実感させられる。また、現代よりも過去の習慣や儀礼、フォークロア等に関する研究の方が多い中、かつての習慣や儀礼等が現代のロシアにおいても何らかの形で継承されていることについて触れられている。これは現代のロシア文化について考える糸口にもなる。以上のことより、本書はフォークロアに関心のある人にはもちろん、ロシア文化を知るきっかけとしても適しているといえよう。

最後に、本書の特徴をもうひとつ紹介しておきたい。本の表紙カバーの裏には、「ロシアの四季暦 早見表」が付いている。これは、固定祭日を書いてある円盤型の表 1 と、移動祭日を書いてある扇形の表 2 を説明書きに従って組み立てれば、それらふたつの祭日を合わせた暦が出来上がるという大変便利なものである。この早見表は新暦と旧暦が同時に分かるようになっているうえ、暦が循環する様をまさに視覚的にも認識できるようになっている。